

2013: The Day God sees God

2013: 人類が神を見る日
[digital edition]

from the Pleiades dimension to the Orion dimension
the power of Sirius was born on earth

kohsen handa

I tried to visualize in my dream state the world of the superluminal. I thought of and imagined the many laws of physics which had no connection in meaning at all. However, that night was different. A strange noise began to mix in the depth of these various images... It was then that a tiny globe emitting white light suddenly appeared just about 30 cm away from my face... The white light globe was spinning like the blade of an electric drill and at last it entered the center of my forehead with a piercing motion.

.....

I began to hear a strange conversation in my head. I couldn't hear clearly but it sounded like two people talking. ...Suddenly the one with the neutral voice started to call my name!

[Kohsen, Kohsen, Kohsen, Kohsen.....]

".....It is me....."

[.....This is OCOT of Pluto. Can you hear me, Kohsen? OCOT is an adjustment-matter of Sirius, participating in Pluto. This contact is all done by the operation from Sirius. The purpose is to produce evolution in Earthlings' consciousness for the preparation of the last constitution of the solar system.....]

『2013…人類が神を見る日』アドバンスト・エディションの再版に寄せて

拙書『2013…人類が神を見る日』がアドバンスト・エディション版となって再版されることを大変嬉しく思っています。この本が最初に出版されたのは今から約10年前の1997年のことですが、発刊当初、全国各地のニューエイジャーたちから激励や賛辞のお手紙をたくさんいただきました。決して読みやすいとは言えない本書にこうした有り難い反響があったのは、おそらく、スピリチュアルな世界に関心のある人々の間で囁かれていた2013年以降の人類の意識的変容について、そのビジョンを宗教や神秘学はもとより哲学や現代物理学の内容を織り交ぜながら、他の情報群とは少々違った切り口で俯瞰して見せたからではないかと思っています。

物語自体は、自らを「オコット」と名乗る高次元意識体とのチャネリングを中心に進行していきます。「オコット」が伝達してきた情報は、そのどれもが地球上の概念とは思えないような異質な言語で構成されており、わたし自身、交信の初期の頃はオコットが一体何を語っているのか皆目見当もつきませんでした。それらの情報群が一つのまとまりあるカタチを持ち始めたのは交信開始から約5年を過ぎた頃だったと思います。それは実に驚異的なものでした。というのも、そこには高次元世界から見たとしか思えないような宇宙の姿や人間生命の全貌が美的な幾何学的秩序のもとに表現されていたからです。そのとき、わたしはまさにこの知の形式への移行こそが、巷で囁かれているアセンションの実質的内容だと直感しました。なぜなら、この幾何学体系は物質の基盤となっている素粒子世界の構造と深く結びついており、現代物理学や現代思想、さ

らには伝統的な宗教的世界観や神秘思想的世界観のすべてを互いに矛盾させることなく統合できる唯一の思考様式のように思えたからです。

10年前に書かれたという点で、本書にちりばめられているいくつかのトピックスを多少古めかしく感じられる読者もいらつしやることでしょう。しかし、そうしたジャーナリスティックな視点だけで本書の内容を判断するのは、できれば避けた方が賢明かもしれません。この本は漠としたチャネリング情報をただ読者に伝達するために書いた本ではなく、2013年以降に訪れてくると思われる新しい世界認識の在り方を予見し、その高次元認識とも呼べる認識様式の可能性を読者の皆さんに、再度、吟味していただくことを狙いとしています。その目的をより明確にするために、このアドバンスト・エディションでは「トランスフォーマー型ゲシュタルト——ベーシック・プログラム」と銘打ち、その新しい認識様式の解説を「第2部」として100頁ほど付け加えました。読者の皆さんも人類の近未来に待ち受けている意識の大変革に想像の翼を広げながら、この高次元認識のモデルを楽しんでいただければ幸いです。

加えて、第1部の方で取り上げている「冥王星」について少し補足しておきます。周知のように、1930年にトンボーによって発見され約80年近く太陽系の第9惑星として親しまれてきた冥王星が去年、国際天文学連合（IAU）の決定によって惑星から準惑星へと格下げされてしまいました。冥王星のさらなる外側にクアオアールやエリスといったカイパーベルト天体が発見され、冥王星を惑星と見なす根拠が希薄になってしまったというのがその理由です。この事態を巡って読者から多くの質問が寄せられました。というのも、チャネリングソースであったオコットという意識体の出自が実は冥王星だったからです。当然、質問の多くはオコット情報の真偽を問うものばかりでした。わたし自身は時代とともに加筆や修正が加えられていく科学的な知

識に振り回される必要など全くないと考えていたので、そういう人たちに対しては、冥王星は靈的には依然として惑星と見なせる存在であるし、むしろ、今まで惑星として扱われていたこの天体がなぜ今となつて惑星の仲間から除外されるようになったのか、その意味を靈的な側面から考えるべきだと力説してきました。

占星術師たちのコミュニケーションの間では、冥王星は死と再生の象徴とされ、人間の魂の中に宿る最も深い靈力の現れとされています。その冥王星がここにきて惑星としての地位から転落したということは、人間の意識の最深部で何か大きな変化が起こり始めたものと考えられることもできます。自らを冥王星の意識そのものと称したオコットは、自分自身のことを人間の近代的な自我の完成を推し進めてきた無意識的な力の源泉として語っています。そして、冥王星自体もまたより深い存在からの力によつて今まさに新しい変化を蒙りつつあり、その変化の要請に従つて、人間存在を別のステージへと運んでいくのが自分の役割であるとも伝えてきています。こうした情報を一方的に信用するのは危険なことであることは重々承知していますが、恐ろしいスピードで激変している現代という時代の様相を考えると、惑星としての冥王星の消滅が、自我として生きる人間の時代の終焉を象徴する出来事であつたとしても何の不思議もないように思えます。

人間の意識の在り方は決して不変なものではありません。それはあのオイディプス神話が示しているように時とともに変移していくものです。朝は四本足で、昼間は二本足になり、夜には三本足となる——スフィンクスが投げかけたこの究極の問いに含まれる寓意は、フランスの哲学者たちが示唆したように、多神教的世界の観から一神教的世界観、それから近代的 세계観へと遷移して来た人間の意識の在り方そのもののメタファードとも言えます。その意味で言えば、人間の意識的成長をここまで推し進めて来た無意識の力は今や長く暗い夜の時代を終えて、次なる薄暮の領域の中へと入つていこうとしているのかもしれない。聖書の内容に即して言うならば、創造のプロセスには実は「八日目」が存在しているということです。創造の七日目に世

界を人間に引き渡し自らは深い眠りの中に入っていた神が、今、再び目を覚まし、八日目の朝を迎えようとしている——この新しい目覚めの朝に東の空から差し込んでくる曙光は、新しく生まれてくる幼い神にとってはおそらく創造の一日目の光と呼び換えてもいいものでしょう。本書のタイトルにも含まれている「人類が神を見る」という言葉は、まさに、この創造の八日目と創造の一日目に起こるこれら新旧二人の神の眼差しの交差のことを意味しています。

世界は今、価値の崩壊の時代を迎え、自然破壊や人間精神の荒廃など、先行きが全く見えない状態の中で深い闇の中を落下し続けています。願わくば、この21世紀という時代に新たに本書に触れる読者のみなさんにとって、この本がささやかなる希望の道標とならんことを——。

最後に、本書の再版に尽力していただいた徳間書店の力石編集長に心より感謝の意を表したいと思います。力石氏の力添えがなければ本書の再版は決して実現しなかったでしょう。重ね重ねお礼申し上げます。

2007年12月24日 聖夜

半田広宣

2013…人類が神を見る日 目次

002 『2013…人類が神を見る日』 アドバンスト・エディションの再版に寄せて

第1部 オリオンとプレアデス

015 第1章 ハーベスト・ビーコン

シュルン、キュルン、光の予兆
声の訪問者、冥王星のオコット
無核質空間
反転する意識
太陽系の最終構成
プレアデスの統制
物質は宇宙精神の影

044 第2章 冥王星シンδροーム

チャネリング・ムーブメントへの疑問
「愛」へのレジスタンス
第9惑星の傾いた軌道

グノーシスの宇宙観
トランスサタニアン革命

064 第3章 タカヒマラ・テンプレート

宇宙創造原理の鑄型
「定質」イザナギと「性質」イザナミ
宇宙輪廻の仕組み
意識進化と太陽の死
2013年、人類は5次元世界を発見する
シリウスのハーベスト・プログラム

093 第4章 シリウスファイルの謎

コミュニケーション・ブレークダウン
冥王星交信日記

104 第5章 空間、この不可視なるもの

タキオンからの召命
物質科学から空間科学へ
「知る者は語らなければならない」
意識の幾何学

122 第6章 思考としての愛

精神世界というシエルター

「抗しがたい絶望」から「否定しがたい光明」へ

科学は「ノス」、生態系は「ノウス」

脱—創造という名の創造

人間の空間認識の在り方が元凶

確固たる宇宙理性によつて愛を証明すること

151 第7章 人間型ゲシュタルト

反転する図と地

エゴイズムの由来

構造からメタ構造へ

マクロ⇨ミクロ、ミクロ⇨マクロ

168 第8章 5次元アセンション

次元観察子ψ1とψ2を探せ！

中心と周縁、ビッグバン理論の欺瞞

無限小と無限大の狭間で

タカヒマラ探査——ψ3、ψ4の発見

客観線と主観線

フラットランドの住人

位置の等化とは何か

リァリテイ・サンドウィッチとへわたし

変換人の空間へ—— $\psi 5$ と $\psi 6$ の等化

球精神への反転

$\psi 7$ の彼岸——うしろの正面、だアレ

209 第9章 シュレディンガー・ルーレット

ミクロ世界に映し出されたマクロ世界

量子的事象の6ミステリーズ

一体何が波打っているのか

波動関数のイマージュ——高次元波動としての電子

プレアデスの統制からオリオンの統制へ

素粒子たちの正体

量子化される時空、そして、意識化される量子

10億分の1の愛

248 第10章 ノース理論誕生

シリウスからノースへ

「意識進化」促進装置としてのピラミッド

変換人の先にいる者

ノース理論の人間界への旅立ち

273 第11章 神聖歴ツオルキン

マヤ文明の碩学・高橋徹氏との邂逅
次元観察子とセフィロト

オカルトの良心

「神聖幾何学者」ケプラーを超えて

次元調整者マヤ

西暦2013年…!

306 第12章 ソールスベリー平原の彼方に

Dear Dr.Bohn

内惑星のアナロギア

待ち人來たらず——意味のある偶然

ミステリーサークルの謎

巨石に託された想い

第2部 トランスフォーマー型ゲシュタルト——ベーシック・プログラム
340 イン트로ダクション——「反転する知」の到来

ヌース理論はイデア論であるということ

トランスフォーマーとは何か

次元観察子という概念

350 プログラム 1 次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 2$ — 方向の対化

355 プログラム 2 次元観察子 $\psi 3 \sim \psi 4$ — 位置の交換の対化

観察の幾何学

3 次元空間上の無限遠と4次元の関係性

人間の内面と外面

反転した空間のイメージ

$\psi 3$ と $\psi 4$ の位置の訂正

$\psi 4$ の由来 — 鏡と他者の眼差し

鏡像にとつての実像とは何か

位置の交換とは何か

391 プログラム 3 次元観察子 $\psi 5 \sim \psi 6$ — 位置の等化と中和

自己という器

光の身体形成

奥行きは4次元である

光速度状態としての自己

即身の風景

$\psi 6$ の描像 — 時空とは想像的自我の異名である

背中合わせの自己と他者、再び

観察子空間のハルモニウム
知覚球体（垂質）を一本の線に統合するもの

422 プログラム 4 次元観察子 $\psi 7 \sim \psi 8$ ——位置の変換と転換

4次元空間での回転とは何か（スピノールの正体）
ローレンツ変換対称性

外面構造の点球への射影

陽子と中性子

トランスフォーマーの始原空間——複素2次元空間
眼差しのセクシュアリティー

モノの中に呑み込まれてしまった文明

西暦2013年に向けて

第1部
オリオンとプレアデス

イシスは永遠の神トートに時の翼を止めさせた。

セトに殺された最愛の夫オシリスの肉片を集めるために。

黒い儀式の後、オシリスは蘇り、

創造主メンのもとでイシスと永遠の愛を誓い合う。

汝、人間よ、イシスの愛を忘れるなかれ。

イシス、セト、オシリス それぞれ古代エジプト神話の中において、天空の神ヌートと大地の神ゲブの間に生まれた兄妹神である。オシリスは弟セトの嫉妬により殺されるが、妹にして妻であるイシスの尽力により復活し、冥界の主となる。

第1章

ハーベスト・ビーコン

夜は深い、昼が考えるよりずっと深い。

——ニーチェ『ツァラトゥストラはかく語りき』

シュルン、キュルン、光の予兆

今でもはつきりと覚えている。1989年11月11日のことだった。おそらく午前4時ごろだったと思う。当時、わたしは兄とは違ったアプローチでタキオンエネルギーの発生装置を作る方法を考えていた。しかし、そのためにはどうしてもクリアーしなければならない難問があった。それは、光速以下の世界とタキオンの世界がどのようなトポロジーでリンクしているのか、その空間構造を見出す必要があったのだ。ところが、この空間構造というのが実にやつぱいな代物だった。

※このアドバンスト・エディションでは、オリジナル版よりも多くの脚注を設けています。新しく付け加えた脚注には「追補」、訂正箇所としての脚注には「訂正」と記しています。読解の参考にして下さい（著者）。

現代物理学には大きく分けて相対論と量子論という2本の理論的な支柱がある。相対論は、天体の運動などマクロ空間に関する力学を記述する理論で、量子論は原子や素粒子などのミクロ空間における力学を記述する理論だ。この2つの理論は現代物理学の枠組みの中では水と油のような関係にあり、両理論の統合さえできれば物理学は一応の完成を見るとまで言われていた。わたしが模索していた空間構造とは、結果的に、この2つの理論に共通する新しい空間概念を作り出すことであつたのである。

そして、その説明のカギは、まぎれもなく超光速粒子と呼ばれている『タキオン』を日常的な空間の中でどのように描像すべきかの解釈にあるとにらんでいた。

アインシュタインの相対論の延長線上にあるこの『タキオン』は物理学者の間でもコンセンサスが得られていない正体不明の存在だったが、この虚的物理量にうまく論理的整合性を持たせることのできる何らかの描像のアイデアはないものか、そのことばかりを考え続けていたのである。

今思えば、長期間にわたる右脳の作業の連続でかなり精神的に疲弊し、一種のトランス状態にあつたのかもしれない。しかし、その時に、まさに確実に、この信じ難い物語はスタートした。

わたしは、ベッドに入り眠りにつくまで、心地よいまどろみの中で思考を巡らすのが何よりも好きだった。時としてそれは思わぬ直観を顕在意識に押し上げてくれるように思える。ニュートンのリンゴ、ガリレオのランプ、アインシュタインのエレベーターなど、過去の偉大な科学法則の原型の多くがこの手のトワイライトゾーンから発信されている。

わたしはその夜も、いつもと同じように、描像不可能とされる超光速の世界のイメージを夢うつつの中で弄もてあそんでいた。S・ホーキングの虚時間宇宙モデルやカルツァークラインの5次元

相対論 ここでは一般相対性理論を指す。アインシュタインによって1906年から1916年にかけて創出された重力理論。重力は時空連続体の曲率の効果だという考え方をする。

量子論 1920年代より、ボーア (Niels Bohr) らによって展開された基本的な物理理論。古典力学に代わる新しい物理概念を持ち、波動と粒子は根本的には同じ実在の2つの側面であるという見方をする。

虚時間宇宙モデル スティブン・ホーキングの提唱したビッグバン・モデルに出てくる、反転した虚の時間も含まれる宇宙モデル。

カルツァークラインの5次元テンソル 238頁参照。

テンソル、ファイバー・バンドル、ベルの定理など、何の具体的な意味の連結も持たない数々の物理概念のイメージが、深く澄み切った思考空間の中をボンヤリとよぎっていく。いつもなら、このまま深い眠りに入っていたことだろう。

しかし、この夜は何か様子が違っていた。立ち上がってくる様々なイメージの奥に、何か奇妙なノイズが混じり始めたのだ。最初はキッチンにある冷蔵庫の音かとも思ったが、発信源はどうやら外部ではなく、わたしの脳の内部にあるようだった。わたしは思考を小休止し、その正体不明の音に意識を集中することにした。間脳の右後方部分、おそらく右内耳の奥あたりだ。まるで壊れかけたラジオのチューン音のような音が鳴り響いている。

〜シュルン、キュルン、シュルン、キュルン、キーン、キーン、シュルン、キュルン……………

数種類の甲高い回転音と、耳鳴りの時に聞くような金属音が混じり合っている。このような聴覚は以前には体験したことがない。

〜シュルン、キュルン、シュルン、キュルン、……………

意識をその音に集中すればするほど、音源が次第に接近してくるのが分かった。それにつれ下半身にチカチカとした痒^{かゆ}みが起こってくる。ジンマシンの感覚に似ていなくもない。その微細な痒みは〜プチプチ、プチプチ〜という気味の悪い音を立てながら全身に広がっていった。まるで細胞に浸透している体液が沸騰し始めたような感じだった。やがて、全身の細胞の一つ一つが体

ファイバー・バンドル多様体(任意の次元を持つトポロジ的抽象空間)における曲率の解析のために生み出された概念。底空間、全空間、全空間上の各点を底空間上の各点に射影する写像という3要素からなる。

ベルの定理 1964年、アイルランド出身の物理学者ジョン・スチュアート・ベルが証明した定理。「量子力学が正しいならば、自然現象の背後にある実在は古典物理学的かつ局所的ではありえない」とする。222頁参照。

液の内圧に耐え切れず膨張し始めた。苦しくて呼吸が思うようにできない。

体全体が風船のように膨らんでいく。それに伴いその奇妙な回転音はボルテージを徐々に上げ、鼓膜をつんざくまでになっていた。膨張が限界に達したと思われた瞬間、頭頂部からシューと空気が抜けるような音がし、細胞の膨張は元の状態に戻ったようだった。わたしは荒い呼吸の中で自分に落ち着くように言い聞かせた。

が、しばらくすると、また、例の回転音が近づいてきて体の膨張が始まった。体内からの圧力が再び高まり、金属音が鼓膜をつんざくように響く。起きようとしても金縛りに襲われたかのよう^にに体が全く動かせない。もし、これが夢だとすれば、目を開ける意志を力強く発現させさえすれば目覚めることができる。わたしは祈るような気持ちで^{まぶた}瞼を思いっきり開いた……………。

薄ぼんやりとした暗がりの中にいつもと同じ見慣れた風景が浮かんできた。ステレオの赤いパイロットランプとビデオのデジタル時計が部屋の中で明滅している。バルコニーのサッシには街灯に照らされて映し出された夜風に揺れる街路樹の影があった。なまぬるい静寂の中で壁に掛けた時計の音だけがカチ、カチ、カチと響いている。

——変な夢だった……………——

少しばかり汗ばんだ額^{ひたい}を撫でながら、わたしは上半身を起こした。金縛りは肉体的疲労に重なって精神的興奮が昂^{たか}ぶっている時によく経験していたが、こういう時は、すぐに眠りに戻るとまた必ず同じ状態が襲ってくる。わたしはベッドから抜け出して、とりあえず居間のソファで一服